

2022年度 独創的研究助成費 実績報告書

2023年 2月 10日

報告者	学科名	建築学科	職名	准教授	氏名	岡北 一孝
研究課題	イタリア・ルネサンス建築における古典主義の多様性とその特質					
研究組織	氏名	所属・職	専門分野	役割分担		
	代表	岡北一孝	建築学科・准教授	西洋建築史	研究代表者	
研究実績の概要	<p>本研究の成果は三つある。一つは、建築史における古典主義をさまざまな側面から検討することでその多様性と生産性を明らかにしたことである（成果資料目録1）。次に、古典主義を考える上で欠かせない「モデル」（手本、規範、範型）という概念を検討するために、モデル（模型）に着目し、建築模型が建築の古典化に果たす役割を明らかにしたことである。そして、初期近代のサン・ピエトロ聖堂の造営事業（新サン・ピエトロ聖堂の建設）における旧聖堂という「モデル」の継承に焦点を当て、ルネサンス期における古典の概念に再検討を迫ったことである。</p> <p>ルネサンス建築史において、古典主義を古代ローマ建築の造形原理への依拠とするならば、とりわけ16世紀以降の都市ローマにおける建築群は、そのほとんどを古典主義建築の範疇に含めうるだろう。しかしながら、これは一つの特別な現象というよりは、芸術創作においては当たり前の傾向にも思える。芸術家たちの創作の中心地が、古代の遺物に満ちたローマになることで、それら数々のモニュメントを無視して創作することは不可能になるからである。その意味では、ローマにおけるルネサンス建築は古典主義建築と理解するよりは、ローマという地域性や伝統に依拠した建築である見るべきかもしれない。</p> <p>古代遺構の調査とウィトルウィウス研究が進展することで、帝政期ローマの建築を規範とし、それのみを参照しようとする態度を古典主義と狭くとらえるならば、ブラマンテ以降に実現したローマのルネサンス建築群のほとんどは、非古典主義ないしは反古典主義といえる建築的要素を含む。しかしながら、そうした狭義の古典主義とはみなせない建築要素は、「もう一つのローマ」の建築、すなわちコンスタンティヌス帝以降の初期キリスト教の教会堂などに由来することが多い。それらもまたローマの偉大な建築として、典拠とすべき建築と見なされていたのである。</p> <p>このように、古典主義をある手本を継承、再現しようとする態度と見なすのであれば、それはルネサンス、バロック、新古典主義という様式史の流れを特徴づけるものに留まらず、どの時代、どの地域にも見られる普遍的な現象であるという結論になる。一方で古典主義を、古典古代を規範とする考え方（ルネサンス期においては、帝政期ローマを手本とする）に限定すると、ルネサンス建築はそのほとんどが非古典的、反古典的な建築の要素をもつ。建築の様式やかたちの展開を古典主義の誕生、成熟、衰退というサイクルで記述することは難しくなる。</p>					

※ 次ページに続く

<p>研究実績 の概要</p>	<p>古典主義という言葉の響きには、時間的、ないしは地理的な隔たりがある何らかのものや現象を意識的にモデル・規範とする態度が含まれているように思える。パラッツォ・メディチという初期ルネサンスを代表するフィレンツェのモニュメントに着目するならば、フィレンツェを離れたローマの建築的要素の意図的な導入、つまり地域的な伝統を離れた「異物」を混淆することそのものが、古典主義に内包されると考えられるのだ。つまりこの邸宅建築においては、ファサードの荒い石積みや、ローマの意匠を身に纏った軽やかな連続アーチのそれぞれがそれぞれ単独で存在するよりも、それらが併置されることで、場所や空間を変容させる作用が生じている。古典と呼ばれうるものが何であろうとも、それが新しい文脈のなかで新しい解釈や意味を帯びるだけでなく、そもそもの文脈さえも異化させる。これこそが古典主義の本質といえるのではないだろうか。</p>
<p>成果資料目録</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 2022 年度日本建築学会大会 PD「建築と古典主義」パネルディスカッション資料 2. 初期近代ヨーロッパにおけるマイクロ・アーキテクチャーの展開と建築模型の役割」、2022 年度日本建築学会大会(北海道) 建築と模型[若手奨励] 特別研究 パネルディスカッション資料、2022 年 9 月、11-22 頁 3. 「初期近代のサン・ピエトロ聖堂造営事業からみた建築の生と死：建築の永続性をめぐって」、『カルチュラル・グリーン』、(4)、2023 年 3 月発行予定 (採録決定済み)